

104年ぶりの里帰り

日米友好の象徴 ポトマック川の桜

日米友好の象徴として1912(明治45)年に日本から米国に贈られ、ワシントン市内のポトマック川河畔に植えられた桜から育てた苗が22日、ゆかりの都立園芸高(世田谷区深沢5)に贈られた。初代校長が奇贈の桜を育苗した縁で、104年ぶりの「里帰り」となった。

【早川健人】

都立園芸高…初代校長が育苗

八代亜紀さんも植樹にかけつけ

同校は08年に東京府立園芸学校として設立、後に西園寺公望元首相の秘書兼執事も務めた熊谷八十三(1874~1969年)が初代校長を務めた。

熊谷は翌年退職して旧農商務省農事試験場の主任技師となり、桜の育苗に携わった。当時の尾崎行雄・東京市長が09年に業者を通じて米国に贈った桜の苗木は検疫で害虫が発見され、全て焼却された。熊谷が育てた苗が12年に贈られ、現在もポトマック河畔で咲き続けている。

今回の苗木は104年前の原木から接ぎ木の手法で育てたもの。米国から里帰りの桜の苗木を植える八代亜紀さん(右から2人目)と米大使館のエバン・マンジノ農務官(同3人目)ら

都立園芸高で



で、「日本さくら会」の歌手の八代亜紀さんが出演をした。八代さんは「桜が日本から米国へ贈られ、帰って来た。100年の歴史を感じて感動しました」と笑顔で語った。

た。植樹に参加した同校園芸科2年、草川雪恵さん(16)は「母校と米国のつながりに驚いた。引き継がれる伝統に関われて光栄に思う。卒業しても毎年、桜の成長を見に来たい」と喜んでいった。米国からは15年に桜の返礼としてハナミズキが贈られた。その1本は同校で高さ約8メートルに成長し、樹齢100年を超えて咲き続けている。